

## 論 文

## 十四日会・回覧雑誌時代の木下利玄

生 井 知 子

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・教授

## Kinoshita Rigen: Before becoming a writer

NAMAI Tomoko

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

## Abstract

This paper introduces the contents of the work Kinoshita Rigen announced to Juyokkakai and the magazine *Bouya*, *Hatsuawase*, *Shirakaba*.

In the process, I learned that Kinoshita Rigen and Shiga Naoya are exchanging materials.

## はじめに

木下利玄が書き残した膨大な原稿や日記等は、現在、神奈川近代文学館に特別資料として寄託されている。その資料の存在については、すでに紅野敏郎氏によって公にされているが、紅野氏が『木下利玄全集』刊行の夢を持っておられたこともあり、内容の一部が紹介されるにとどまっていた。<sup>①</sup>そこで今回私は、木下利玄が、十四日会及び回覧雑誌「暴矢」「望野」「初裕」「白樺」に発表した作品がどのようなものであるのかを、より詳しく明らかにして行きたいと思う。さらには、その調査の中で見えてきた木下利玄と志賀直哉との素材のやりとりについても報告したいと思う。

## 第二章 十四日会

木下利玄が、武者小路実篤・志賀直哉・正親町公和と行っていた文学読み合わせ会・十四日会に、『お京』『万霊塔』を持ち寄り、『心の花』で発表したことはよく知られている。今回は、それ以外に木下利玄が十四日会に持参した作品について紹介したい。

## 第一節 『仲なほり』

木下利玄が十四日会に出したと考えられるものに『仲なほり』という作品がある。

明治四十年十一月二十七日の木下利玄の志賀直哉宛絵葉書（『志賀直哉宛書簡』所収）では、『仲なほり』三十日昼迄にかきあげて午後広次の家にてお目にかゝるべし。という記述がある。

また十二月十九日の木下利玄の志賀直哉宛葉書（『志賀直哉宛書簡集』所収）にも、『仲なほり』は始 元良さんの心理が友禪の振袖をきて道成寺でも踊るやうなものが書きたかつたのだが駄目でした。気をとりなほし明日位修正の心組、『二十一日の十四日であはう』との

記述がある。

明治四十一年三月十四日に、木下家で十四日会があったことは志賀日記にも記されている。この日の木下利玄日記<sup>(2)</sup>には、『仲なほり』の第二作のかきかけをつづける、昼迄には少しもはかどらぬ、午后二時頃迄には大に進捗の見込のところ午後一時頃になると早志賀が来る、かまはないから書きたまへと云つてかきつづけやうとしてると武者が来る、程なく沙鷗がくる、それから書いて兎に角纏めたが至てあつけないものである、読みは読んだが学校の作文位のものだ、少し恥かしい位のものだ、まあこの儘残して置けばなになるだらうと第一仲なほりと第二仲なほりと合せてしまつて置く事にする、どうも一度生れそこなつたもの故うまく行かぬ、それにどうしても作つたもの故血が通つてない、後に何か長いもの、挿話にでもしやう。』との記述がある。

この『仲なほり』の冊子が特別資料の中に現存している。

一作目の『仲なほり』は、二十字×二十行の海雲堂製原稿用紙十一枚に墨で書かれたものである。表紙がつけられ、そこには「小青」の署名と《傑作 仲なほり 第一印象》という表題が書き込まれている。

「上」は、三月三日の雛の節句に伯母様の家に招待された姪達が飯事をするが奥様のなり手がなく、遅れてやってきた「たかちゃん」の弟の「俊ちゃん」を殿様役にする。出番のない「俊ちゃん」が怒つて飯事の膳をめちゃくちゃにするというストーリーである。

「下」は、その晩、雪の中を蛇の目傘を相合い傘にして家に帰る際、「たかちゃん」が、「俊ちゃん」に寒くないかと気遣つて声をかけたことから、二人の心に暖かみが通い出し、仲なほりをするというもので、姉と弟のデリケートな心情を書いた短篇小説である。

二作目の『仲なほり』は、二十四字×二十四行の海雲堂製原稿用紙五枚に墨で書かれたものである。表紙がつけられ、「小青」の署名と「戊申三月十四日」の日付、『仲なほり 第一印象』という表題が書き込

まれている。

こちらは、一作目の『仲なほり』の内容に、大人になった《自分》が心理学を学んで子供の頃の経験を思い出すという枠組をはめたものである。

二十二になった《自分》が、心理の試験勉強をしていると、ノートに人格の分裂のことが書いてあった。その中に、ある国では離婚裁判を起こした夫婦を一間に閉じ込め、一揃の日常の道具のみ与えると、離婚訴訟はいつとはなしに取り消しとなる、日本でも金銭上の訴訟をしていた兄弟に一つしか火鉢を出さなかったら、穏やかに収まったという例があった。その例を読んで、子供の時のことを思い出した。《自分》が十一、二、姉が十四五の時、叔母の家に雛の節句に呼ばれて飯事をするようになった。《自分》は殿様にさせられ、何の仕事もないので不平を言い、筵を踏みにじつて姉と仲違いした。夕方、雪の中、俤に二人で乗って帰ることになり、姉が寒くないかと声をかけてくれて心が暖まり、車夫が悪者ではないかと不安を感じて姉と心が一つになった。以上のようなストーリーである。

## 第二節『孤児』

もう一つ、木下利玄が十四日会のために書いたものに、『孤児』という作品がある。

明治四十一年五月二十四日の木下利玄の志賀直哉宛書簡（『志賀直哉宛書簡』所収）には、『三十日に十四日会にもつて行くものをかくのです、京都の暮春と東京の初夏をかくのです、』とあり、五月三十日の武者小路実篤日記（『彼の青年時代』所収）によれば、この日、武者小路家で十四日会があり、『木下は「孤児」の一と二を書いて来た。』という。

六月四日にも十四日会があり、武者小路実篤日記（『彼の青年時代』所収）によれば、この日、武者小路実篤は『孤児』を読みつつ評を書

いたとあり、同日の木下利玄日記<sup>(2)</sup>によれば『孤児』は無車が評をくれた、本文は志賀に廻す、とある。六月十日の木下利玄の志賀直哉宛葉書(『志賀直哉宛書簡』所収)にも『孤児の批評うけたまはりに参上しやうか』との記述がある。

この『孤児』の原稿も現存している。

二十四字×二十四行の海雲堂製原稿用紙三十九枚に墨で書かれており、表紙には、『明治四十一年六月二日』の日付と「小青」という署名、『孤児』という表題が書かれている。

作品は、「一」「二」「三」の構成。「一」では、広田夏雄の弟・常彦(十一歳)を鈴川に養子にやるという話が起る。鈴川の娘は八歳である。夏雄は五つの時、伯父の跡をついで当主となり、実父母から引き離されて上京し、孤児となって家扶の山下に育てられた。夏雄は悩むが、常彦を養子にやることにする。

「二」では、高台寺境内の円徳院で祖先の百五十回忌の法事がある四月二十一日、夏雄は鈴川未亡人・春子と娘の冬子に会う。

「三」では、夏雄は、京に行く常彦と鈴川未亡人を新橋の停車場に見送る。養子の話を山下が常彦に伝えた時、彼は泣きもしなかった。夏雄は常彦を孤児だから苦勞をすると哀れに思う。常彦からは京都に無事着いたとの電報があり、新しい母子の仲よき様子を考えて夏雄は微笑むが、うまく行かなかった場合を想像し、自分は孤児だと泣き出す。

以上のような内容で、木下利玄の弟・利昌の養子縁組をモデルとしたものである。

## 第二章 回覧雑誌

木下利玄が、武者小路実篤・志賀直哉・正親町公和と、明治四十一年七月二十五日から週一回発行の回覧雑誌「暴矢」を始めたことは周知の事実である。この回覧雑誌の名前は、八月二十九日の木下利玄日

記<sup>(3)</sup>によれば、同日に「望野」と改名されている。明治四十二年五月二日の木下利玄日記<sup>(3)</sup>によれば、五月一日に、志賀・正親町・武者小路が話し、「望野」は、志賀・正親町の「舞羅」と武者小路・木下の「初裕」に分裂することになった。その後、九月にはふたたび四人で回覧雑誌「白樺」を発行することになったようで、九月二十日の木下利玄日記<sup>(3)</sup>には「白樺」第一号を読んだ記録がある。

これらの回覧雑誌に掲載した作品は、バラバラにほぐされて執筆者のもとに戻された。志賀直哉のもとに戻された原稿は全集に収められているが、木下利玄の場合は、紅野敏郎氏の論文などでその存在を知ることが出来るものの、一般に読むことは出来ないままになっている。木下利玄は、これらの回覧雑誌に出した原稿を、ほぼその発表順にまとめて冊子としている。第一集「宿」、第二集「ふところ」、第三集「女の人」である。すべてを翻刻することは困難なので、ここでは、冊子の掲載順に作品の概要をまとめていく。

### 第一節 第一集「宿」に綴じられた作品群

第一集「宿」は表紙に「宿」と表題が書かれ、「利玄」という署名が書かれている。二十四字×二十行の東京相馬屋製原稿用紙にペン書最初に目次がつけられている。以下、作品ごとに表題を【】で囲み、概要を記していく。

#### 【数入】

署名は「小青」。原稿用紙二枚で、31〜33のナンバーが振られている。最初に綴じられていること等から「暴矢」第一号に発表されたと推定できる。

《僕》が十四歳の年の盆の十五日、一人で高輪に墓参に行った時の話。行きつけの花屋の子の昇吉が手伝ってくれる。彼は子供の時から知り合いで、木挽町の鯉節問屋に奉公に行っていたが、四五年ぶりに

戻っていた。昇吉から小僧の生活のつらさを聞く、というストーリーである。

### 【敷入（つゞき）】

署名は「木下」。原稿用紙四枚で、29～36のナンバーが振られている。明治四十一年八月二日の木下利玄日記に《昼の中は敷入のつゞきをかく、暴矢第二号の原稿なのである。》とあるのが、この作品である。

『敷入』の続きで、昇吉と話をし、墓参から俚に乗っての帰途、歩いている小僧さんが、馬車に乗っている同級の華族の奥町さんの馬丁に突きのけられるのを見て、華族が嫌いになり小僧さんに同情するようになったという話である。

### 【あさぼらけ】

表題の脇に《(散文にて御免)》と記され、署名は「ロングフェロー作」「小青訳」となっている。原稿用紙二枚で、43～46とナンバーが振られている。

八月八日の木下利玄日記には「暴矢」第三号の原稿「第七義より見たる川開き」と短詩の翻訳の執筆記録があるが、短詩の翻訳というのが、この原稿であろう。

### 【第七義より見たる川開き】

署名は「紀乃」。原稿用紙二枚で、77～80のナンバーが振られている。明治四十一年八月十一日の木下利玄の志賀直哉宛絵葉書（『志賀直哉宛書簡集』所収）にも《第七義より見たる川開きなど、云ふ第七十義位のものを出した》との記述がある。「暴矢」第三号に出したものである。

明治四十一年春の関西旅行の時に志賀が買った歌麿の絵は両国の川開きの絵だったという所から書き始め、実際の川開きを見ることにす

ると続けたもの。

### 【第七義より見たる川開き（承前）】

署名は「小青」。原稿用紙六枚で、13～24のナンバーが振られている。最後に《こんな文章を望野に出すのは甚恐縮する次第<sup>シデエ</sup>や。》とあるので、回覧雑誌が「望野」と改名された後のものである。川開きのある八月一日の朝からの様子を描いたもので、続編であるため、発表の順番を入れ替えて綴じたのであろう。

### 【大原より ゆきがけ】

署名は「小青」。原稿用紙三枚。「暴矢」第四号で発表か。八月九日から房州への一人旅で、大原に着く迄の汽車の中の様子を描いたものの。

### 【海岸】

署名はなし。原稿用紙二枚。『ゆきがけ』に続けて「暴矢」第四号に出したもののか。九十九里浜の様子を描いたもの。

### 【盆踊】

署名は「小青」。原稿用紙四枚で、85～92のナンバーが振られている。八月十四日の晩、海岸で盆踊を見たことを描いており、八月十八日の木下利玄日記に「大原通信（暴矢原稿）」との記述があるので、「暴矢」第五号で発表されたもののか。

### 【大原より 三郎】

署名は「小青」。原稿用紙五枚で、91～100のナンバーが振られている。文中に、《この刀の何故来たかはこゝで芝居をやるからであるのだが之は第八十三義に涉るので暴矢には見合せる事にする。》との記述が

あるので、執筆時点では「暴矢」という文字が使われていた「暴矢」(「望野」第六号のもの)と推定する。保養のため大原に來ている江戸っ子の笠尾三郎という十四歳の子供の様子を描いたもの。

### 【恋人】

署名は「アンデルセン作」「としはる訳」。原稿用紙五枚で、79～88のナンバーが振られている。アンデルセンの童話の翻訳。

### 【二つ莢の五つ豆(アンデルセン)】

署名は「としはる」。原稿用紙六枚で、207～218のナンバーが振られている。アンデルセンの童話の翻訳。明治四十一年十二月二十六日の武者小路実篤の志賀直哉宛葉書(『武者小路実篤全集』所収)に、第七号が厚く二百三十六頁あったと書かれていることからすると、これは「望野」第七号のものかも知れない。

### 【一枚未滿】

署名は「木下利玄」。原稿用紙一枚で、89～90のナンバーが振られている。短歌七首・俳句一句。

### 【燈籠ながし】

署名は「小青」。原稿用紙三枚で、21～25のナンバーが振られている。本文末尾に《これは昨年の秋の九月にかけて置いたもの、小説の一部分に利用しやうと思つて居たのだが今度志賀生のせめふさぎ流にかいたのです。》との記述があり、明治四十一年九月二十八日の木下利玄の志賀直哉宛書簡(『志賀直哉宛書簡』所収)にも、《昨秋かいた燈籠ながしで此度の責をふさぐ。》とある。「望野」第十号のものか。九月三日夜の淀橋における燈籠ながしの風景を描いたもの。

### 【ながき一日】

署名は「木野」。原稿用紙二枚。十月三日のことを、当日の夜に漫然と書いたもの。「望野」第十一号に出したもののか。

### 【Herbststimmung: (小青訳)】

署名は「T」。原稿用紙二枚。木下利玄の横尾照子との縁談に対する思いをモデルとした作品。机の抽出しに手紙の書きかけが丸めである。岡次郎宛、鳥尾さん宛、故郷の家扶宛などだ。横田家の家柄、鳥尾さんの親切、養女の話などが書いてある手紙の書きかけを燃やし、今度の縁談もこんなにすぎってしまったのかと淋しさを覚える、というもの。

明治四十一年九月二十八日の木下利玄の志賀直哉宛書簡(『志賀直哉宛書簡』所収)に、《今朝今度の話について家扶に出さうとして出さなかつた手紙や国へ出す手紙のかきそこなひなどをやいた、それで今度の談もかくすぎたのかと思つてうら淋しい思がした、それをかいて見たがなんだか続風流懺法のやうにもあつてやめにした。》とあるのが、この原稿であろう。

### 【二本ドリ鳩鳥】

署名は「小青」。原稿用紙三枚。小説の初めの部分である。利根川の堤を散歩しながら滑川さんに聞いた、鳩鳥が切ない声で鳴いている沼で起こった物語。青柳家には、おはまという一人娘が居た。おはまが十六歳の時、合歓の木の下に梨の入った籠を背負った男が居り、おはまは彼に梨をねだる、という所までを描いている。

### 【鳩鳥(ツキ)】

署名は「小青」。原稿用紙三枚。おはまは梨を呉れた若者・逸三郎に恋をするが、二人の村が水利争いで対立することになる、という所



までを描いている。

### 【沙鷗兄に。】

署名は「小青」。原稿用紙六枚。正親町公和への便り。ローレンスの講義が分からないので英文科をやめて国文科に変わろうかと思うが志賀に美学科を勧められ、志賀も美学に傾いているので、どうするか悩んでいるという内容。

### 【望野の諸氏殊に沙鷗に与へて藤岡博士の美術展覧会の批評を報じ併せて絵画の氣品を論ず。】

署名は「小青」。原稿用紙四枚。十月三十日の大学における藤岡博士の展覧会の日本画評の紹介をし、日本画が間違った氣品にとらえられていると述べたもの。「望野」第十五号に出したもののか。

### 【二月堂】

署名はなし。原稿用紙四枚。明治四十一年十一月六日の木下利玄日記に《望野原稿「二月堂」をかく。》とあり、「望野」第十六号に出したものと推定。関西旅行で見た二月堂の様子を描いたもの。

### 【高野山】

署名は「小青」。原稿用紙七枚。歌舞伎座の秋興行で沢村宗十郎の「高野山」を見、この春、高野山に登った時のことを思い出した、ムードが似ているので二つを並べて書いてみることにしたと書き起こし、「紀州の高野山」として、高野山に登った時のことを書いている。

### 【橡木】 とらのき

署名は「小青」。原稿用紙四枚。小学校の時、高木敏一郎という友達から、橡の実を貰い、庭に蒔いた。橡の木が大きくなった頃、高木

は軍人となった。日露戦争があり、重傷高木敏二郎という記事が出、あの高木だろうかと思像する、という小品。

### 【東京の会話】

署名は「小青」。原稿用紙二枚。新嘗祭の日に、東京で聞いた人々の会話をスケッチしたもの。十一月二十三日の新嘗祭後の「望野」第十九号に掲載か。

### 【晩秋の意】

署名は「小青」。原稿用紙二枚。集まってペンを走らせる無車・半月らの様子を書いたもの。

### 【鏡花会の記】

署名は「小青」。原稿用紙三枚。不忍弁天堂の玄関で鏡花会の出席者を待っていると喜多村録郎、英朋、鈴木鼓村、柴田つる子、長谷川しづれらが来たことを描いたもの。

### 【鏡花会の記】

署名は「小青」。原稿用紙三枚。鏡花との会話の様子を描いたもの。

### 【按摩】

署名は「小青」。原稿用紙二枚。時雨が降る中、笛を吹いて客を求めて歩く按摩のわびしさを描いたもの。

### 【月見草の序、】 作合

署名は「武者」「木下」。原稿用紙一枚。『月見草』を木下利玄と武者小路実篤の合作として発表する事情について述べたもの。

明治四十一年十二月十八日の木下利玄日記には《それから無車と

月見草の合作をやった。いつか自分のもつて居た筋をかへてかいた。無車の筆で大に活きた。序もかいた。』とある。明治四十一年六月十七日の木下利玄の志賀直哉宛葉書(『志賀直哉宛書簡集』所収)には『月見草は二十日にはとても出来ない』と記されていた。十四日会に出そうとして書けなかったものを、武者小路実篤との合作という形で書き上げ、序もつけて発表したのだろう。『望野』第二十二号に掲載か。

### 【月見草】

署名は「小青」「無車」。原稿用紙五枚。最後に、『061218』と日付が入っている。七日月の照らす夜、川岸には月見草の花が咲いている。男は、向こう岸に女を見いだす。その女の眼には、彼が餓えているものがある。男は川の中へと進み、流されていく。女はあざ笑いい、岸には月見草の姿だけが残る、という小品。

### 【若草】

署名は「木下」。原稿用紙二枚。丘の上から春の歌を歌っている女や、ほの白い布を振りながら来る二人の女を描いたもの。

### 【椿】

署名は「木下」。表題は『散文詩』と書いて消して、左に『椿』としている。原稿用紙二枚。納屋の裏の藪陰に細い流れがあり、その水には幾年もの桎や椿の落葉・落花がしずんでいる。暮春の夕方、帰ってきた『私』が橋を渡ると、深紅の椿が水へと落ちた、というもの。

### 【写真】

署名は「小青」。原稿用紙二枚。原稿用紙の冒頭三行は『椿』の続きを書き、抹消して使用している。小学校尋常四年を卒業した時、東が一番、『自分』が二番だった。二人は写真の交換を約束し、東から

写真は届いたが『自分』からは送らぬ前に、東は亡くなってしまった、という小品。

### 【偶感】

署名は「木下」。原稿用紙二枚。『自分』が『甚しく意志の弱いのを嫌らず思』い、『意志の強い人』を羨ましく思う。志賀の『弱意の利』は内容はいいが、題は面白くない、という思いを述べたもの。志賀の未定稿57『弱意の利』が書かれたのは明治四十一年十二月二十三日のことなので、それ以降の執筆である。『望野』第二十三号に出したか。

### 【湯河原から 一、函嶺まで】

署名は「木下」。原稿用紙三枚。諸岡・北島・松平と箱根に行く様子を描いたもの。

### 【湯河原から 二、地震】

署名は「木下」。原稿用紙六枚。底倉の葛屋でひどい地震に遭遇した際のスケッチ。少し加筆して、公刊『白樺』第二巻第一号(M44・1)に『山』の総題の下、『地震』として発表した。

### 【三、軽便鉄道】

署名はなし。原稿用紙七枚。小田原で三人に別れ、軽便鉄道に乗り、湯河原まで行く様子のスケッチ。軽便鉄道のことは、志賀の『湯河原より』に書かれているとコメントしている。

### 【四、除夜】

署名はなし。原稿用紙三枚。柳・志賀・田村と共に過ごした大晦日の湯河原の宿屋のスケッチ。最後に『P.302 (但し白紙ぬき)』と書き込みがある。『麦』第六号の批評欄に、『望野』第二十五号に木下利玄の

『除夜』が載るとの記述がある。

### 【宿<sup>しゆく</sup>】

署名は「木下」。題のわきに紫鉛筆で、『(山の宿<sup>しゆく</sup>)』と書き込まれている。原稿用紙十七枚で、紫鉛筆で、91-124のナンバーが振られている。明治四十二年一月九日の木下利玄日記に『小説「宿」をかきつづけたが中々思ふやうには筆がすまない、午后になつて無理にまとめた。(中略二十五号とちる、三百頁許で大変あつい。』とあるので、『望野』第二十五号掲載作品と分かる。

伊太利に行く画家のA君の送別のため、『自分』はS君と鹿野山に行った。丸屋では二番目の娘・おこうの供養の念仏の声が聞こえる。友人K君の従妹のお静さんに似た末娘・おことは姉の代わりに東京の実践女学校に通っていることが分かる。翌日、一番上の娘・おあきが給仕をしてくれる。一年後の春休、『自分』がS君の後を追って鹿野山に行くと、婆さんもおあきも亡くなっており、老杉も借金の抵当になつて切り倒された。以上のようなストーリーである。

大幅に書き直し、公刊「白樺」第三卷第三号(M45・3)に『山の宿』として発表した。

### 【二階】

署名は「木下」。表題は、『桃』と書いて消して、その下に『二階』と書いている。原稿用紙四枚。画家である『自分』は遠縁の二階を借りて絵の修業に励んでいる。その奥さんに誘惑されるが避ける。夕飯の時、夫の前で、奥さんは平然としているという小品。やや手を加えて、公刊「白樺」第一卷第九号(M43・12)に発表した。

### 第二節 第二集「ふところ」に綴じられた作品群

第二集「ふところ」は、表紙に「ふところ」と表題が書かれ、署名

はない。二十四字×二十行の東京相馬屋製原稿用紙にペン書。表紙裏に目次がつけられている。

### 【ふところ】

署名は「木下」。表題は、『子守唄』と書いて消して、その右に『ふところ』と記している。原稿用紙二枚。「望野」第二十六号に発表されたか。温泉から上がって床の中に居た『自分』は、隣室から泣く子をなだめる母の声と子守唄がするのを聞き、幼児に戻って母の懷に抱かれているように感じて安らかな夢路に入ったという小品で、加筆して、公刊「白樺」第一卷第二号(M43・5)に発表した。

### 【紅薔薇の簪】

署名は「木下」。原稿用紙三枚。最後に、『(四二、一、二十三)』とある。明治四十二年一月二十三日の木下利玄日記に『朝無車の家へ行つた、志賀が後から来た、自分はこゝで「紅薔薇の簪」と云ふ短篇をかいた。それから二十七号をとどた。』とあるので、『望野』第二十七号に出したものと分かる。

高橋の母、娘・ゆう子、『自分』＝平井、平井の所に逗留中の吉田が、駅まで歩きながら話をする。高橋母子は、吉田の逗留中に是非平井家で音楽会を開きたいと言うが、吉田を出しにゆう子のヴァイオリンを皆に聞かせたいと願っているのだ、という小品。

### 【帰京】

署名は「木下」。作文集「ふところ」の目次には題名が記されているが、冊子からは抜き取られ、別になっている。原稿用紙二十二枚で、14までナンバーが振られている。最後に『(四二、一、三〇)』と紫鉛筆で書き込みがある。「望野」第二十八号に出したものか。志賀直哉と木下利玄が湯河原の中西屋から門川・小田原を経て帰京した時の様



子を描いた作品。

### 【訪れ（ツルゲネーフ）】

署名は「木下」。原稿用紙二枚。最後に《四二、二、六、昼十二時。》とある。「望野」第二十九号に出したもののか。翼の生えた小さな女が室内へ舞い込んできたことを描いたツルゲネーフの作品の翻訳。

### 【淡路守】

署名は「小青」。原稿用紙三枚。四代前の先祖である中国地方の大名・淡路守利照は、三十代の壮年で学問を奨励し殖産興業にも心を尽くした。ある年、参勤交代で江戸に上る時、大井川が川止めになったため、利照は愛妾を宿に呼び酒を飲む。これを止められなかったお伴頭は切腹し、幕府は利照をお国替にしたという小品。

### 【頭巾】

署名は「木下」。原稿用紙二枚。車中で目撃した、頭巾をかぶった赤児を背負い、十四歳くらいの子を連れた貧しげな三十歳あまりの女性のスケッチ。

### 【雨もよひ】

署名は「木下」。原稿用紙四枚。最後に横書きで《(09.2.18)》と日付が書かれ、《英語と独語の語学試験が近づいたから二三号の間は責ふさぎだけ出す事にします。》とある。「望野」第三十一号に出したもののか。日氏の案内で西陣・下鴨・美濃吉・都踊に行ったことを描いたもので、公刊「白樺」第二巻第七号（M44・7）に『雨』の総題の下、「雨もよひ」として発表した。

### 【同情】

表題の左に、《（同情と云ふのが詩の題なり）》と書いてある。署名は「木下」。原稿用紙二枚。最後に《09. 2. 26.》とある。「望野」第三十二号に出したもののか。エミリー・ブロンテの詩の翻訳。

### 【接吻】

署名は「木下」。原稿用紙二枚。最後に《09. 3. 1.》とある。「望野」第三十三号に出したもののか。チューリップの花に酔う蛇のように、歓楽に酔う二人もチューリップの花に入って死にたいの思いを描いたもの。

### 【矢と歌（ロングフェロー）】

署名は「木下」。原稿用紙一枚。最後に《09. 3. 1.》とある。「望野」第三十三号に出したもののか。ロングフェローの詩の翻訳。

### 【鳩（ツルゲネーフ）】

署名は「木下」。原稿用紙三枚。最後に《13. 3. 1909.》とある。「望野」第三十四号に出したもののか。暴風雨の中、友を探した鳩を描いたツルゲネーフの作品の翻訳。

### 【Tulipano】

署名は「木下」。表題の横に、《（散文詩）》と鉛筆で書き込まれている。原稿用紙二枚。最後に《09. 3. 1.》とある。「望野」第三十三号に出したもののか。クレオパトラのような女が恋の恨みで死に、女を葬った上に咲いた深紅のチューリップの花の露を飲んだ者は次々に死んだ、若い男が死ぬが連れの女が吸う前にチューリップは露をこぼした、というもの。

## 【物言はぬ本】

署名は「小青」。表題の横に《Andersen の (Pictures of Travel) の一節》とある。原稿用紙四枚。アンデルセンの作品の翻訳。

## 【見物】

署名は「木下」。原稿用紙六枚。久々に上京して《自分》の家に逗留中の荒木老人を連れて上野浅草見物に出かけるが活動写真の所ではぐれてしまい、見つからぬまま家に帰ると荒木老人はすでに帰宅していた、という小品。加筆して、公刊「白樺」第一巻第四号(M43・7)に発表した。

## 【憧憬】

署名は「木下」。原稿用紙一枚。新緑の頃になると、憧憬心地が強くなる、強い沈丁花の薫を嗅ぐと人が恋しくなるといった心境を描いたもの。

## 【小模】

署名は「木下」。原稿用紙四枚。この作品については、「第三章 素材のやりとり」で述べる。

## 【続鳩鳥】

署名は「木下」。原稿用紙五枚。第一集「宿」に綴じられた『鳩鳥』と『鳩鳥(つゞき)』の続編で完結までを描いている。

水利争いが隣村の村長の仲裁で和睦となり、祝の夜、おはまと逸三郎は結ばれる。おはまの父も結婚を許した。七月七日過ぎ、二人が舟で笹沼の真菰を刈っていると筑波山から雲がわいて激しい夕立となり、雷に感電した逸三郎は水に落ち、助けようと水に入ったおはまは泳げなかった。逸三郎は二十二歳、おはまは十八歳であったという。《自

分》は滑川さんの家を辞し、二人の亡骸と熱烈な恋を呑んだ笹沼に鳩鳥の鳴くのを聞き、二人の霊が鳩鳥になったのだらうと考えた。以上のようなストーリーである。

## 【芥子と鳩】

署名は「木下」。原稿用紙四枚。ある花壇に咲いた白い芥子と赤い芥子が相手の美しさを妬む。飛んできた鳩は両方の美しさを讃美する歌を歌うが、芥子はそれぞれ思いをかけ、鳩は困惑する。赤い芥子はお嬢様に切られ、白い芥子も雨に打たれて散ってしまう。翌朝、飛んできた鳩は悲しみの歌を歌うというもの。

## 【雨のやみ際】

署名は「木下」。原稿用紙三枚。若干修正して、公刊「白樺」第二巻第七号(M44・7)に『雨』の総題の下、「雨のやみ際」として発表した。その際、末尾に《明治四十二年五月稿》と記された。執筆時期から考えて、「初稿」に掲載されたものであろう。大学の講義が終わってから、雨の中、越前堀の水難救助会へ行くまでのスケッチである。

## 【夢】

署名は「小青」。原稿用紙三枚。最後に《(五月二十日明方見る)》とある。明治四十二年五月十九日の木下利玄日記<sup>3)</sup>に、《初稿二号とちた》とあるので、「初稿」第三号に掲載されたものか。志賀・細川と小笠原あたりの島に旅行したり、鎌倉の海に大村兵部太夫の銅像が立っていたり、市村羽左エ門が出てきたりする夢と、その夢を見た原因を書いたもの。

## 【薔薇と虻】

署名は「木下」。原稿用紙四枚。花壇に來た虻は、薔薇の花の蜜を吸って眠らせてしまったので、娘は薔薇以外の花をつんで出かけた。薔薇が大変怒ったので、虻はお詫びに他の花の匂いを吸い取って薔薇の花に移したので、薔薇だけがいい匂いを放つようになり、娘は薔薇だけをつんで恋人と会うようになった、というストーリー。

## 【序】

署名は「小青」。右上に紫鉛筆で《初拾五号》と書き込みがある。原稿用紙一枚。アンデルセンの『A Picture book without pictures』を全部翻訳したいが、初めの方はすでに人がやっているの、第三十晩から順に最初の晩の方へ及びたいと述べたもの。

## 【第三十夜】

署名はなし。原稿用紙二枚。アンデルセン『絵のない絵本』の翻訳。熊と兵隊ごっこをして遊んだ子供たちの話。

## 【第二十九夜】

署名はなし。原稿用紙二枚。アンデルセン『絵のない絵本』の翻訳。馭者が馬を休ませる旅籠の様子。

## 【第二十八夜】

署名はなし。原稿用紙二枚。アンデルセン『絵のない絵本』の翻訳。スウェーデンの古い精舎に眠る過去の王の様子。

## 【第二十七夜】

署名は「木下」。原稿用紙二枚。アンデルセン『絵のない絵本』の翻訳。大海原を南方へ飛んでいく白鳥の群の中の疲れ果てた一羽が水

面で休んで、また飛び立つ様子。

## 【梅雨】

署名は「木下」。原稿用紙七枚。梅雨の夜、K君と一緒にS君の家を訪問したこと、S君の赤児の様子、帰途の様子を描いたもの。

## 【上野国四万温泉より】

署名は「木下」。原稿用紙三枚。木下利玄が、細川・徳川・裏松・加藤・斎藤と六人で四万温泉に着くまでの様子を描いた便りで、最後に《六月二十四日夜 上野四万温泉田村にて 小青》とあり、《実篤兄》と宛名が書かれている。

## 【草津温泉より】

署名は「木下」。原稿用紙四枚。雨の中、草津に着くまでの様子を描いたもので、最後に《六月二十五日 上野草津温泉にて 木下》とある。

## 【信州渋温泉より】

署名は「木下」。原稿用紙七枚。渋温泉に行くまでの様子を描いたもの。

## 【六月二十七日渋より帰京】

署名は「木下」。原稿用紙四枚。帰京の様子を描いたもの。

なお、目次にはなく綴じられてもないが、この第二集には次の作品が挟まれている。

## 【雨物語 (一) 山道】

署名は「小青」。原稿用紙二枚。雨の中、木曾福島から黒沢まで六人で歩いて行った様子を描いたものである。

## 第三節 第三集「女の人」に綴じられた作品群

第三集「女の人」は表紙に、「女の人」と表題が書かれ、署名はない。二十四字×二十行の東京相馬屋製原稿用紙にペン書。最初に目次がつけられている。

## 【女の人】

署名は「木下」。表題は、『憧憬<sup>あこがれ</sup>』と書いて消し、上部に『女の人』と書いている。原稿用紙四枚。最後に『(四十二年四月十八日)』とある。目次では、この作品は『(麦第十二号投稿)』とされているが、『麦』第十三号批評欄で取り上げられていることから、『麦』第十三号に出されたものと考えられる。

招魂社の祭で一度、夢で一度会った女の人への憧憬を描いたもので、前半と後半を入れ替え大幅に書き直して、公刊『白樺』第一巻第五号(M43・8)に発表した。

## 【水晶房】

扉がつけられ、『水晶房』の表題と「木下」の署名が墨で書かれている。『白樺一』と紫鉛筆の書き込みがあるので、回覧雑誌『白樺』第一号に出されたことが分かる。

本文冒頭には『The Crystal Cabinet』という表題と「木下」の署名がある。最後に『(William Blake)』とあることから、ブレイクの詩の翻訳であることが分かる。原稿用紙二枚。

## 【第二十五夜】

扉がつけられ、『第二十五夜』の表題と「木下」の署名が墨で書かれている。『白樺一』と紫鉛筆の書き込みがあるので、回覧雑誌『白樺』第一号に出されたことが分かる。

本文冒頭にも『第二十五夜』の表題と「木下」の署名がある。原稿用紙一枚。第二集「ふところ」に綴じられたアンデルセンの『絵のない絵本』の翻訳の続きで、煙突から出てくる煙突掃除の少年の様子を描いたものである。

## 【霧の朝】

扉がつけられ、『霧の朝』の表題と「キノシタ」の署名が墨で書かれている。『白樺壹』と紫鉛筆の書き込みがあるので、回覧雑誌『白樺』第一号に出されたことが分かる。

本文冒頭には最初、『小田原提灯<sup>おだはらちやうちん</sup>』という表題と「雨村」「小青」という署名があつたが、墨で『小田原提灯<sup>おだはらちやうちん</sup>』と「雨村」を消し、左に『キノアサ』と記している。原稿用紙七枚。

八月十一日の朝、志賀一行とともに、霧の中、芦の湯の紀伊國屋から下山し、小田原で志賀一行と別れて田中雨村を訪問する様子を描いたもので、前半に手を加え、後半はカットして、公刊『白樺』第二巻第一号(M44・1)に『山』の総題の下、『霧の朝』として発表した。

【顔の創<sup>きず</sup>】

扉がつけられ、『顔の創<sup>きず</sup>』の表題と「木下」の署名が墨で書かれている。『白樺二』と紫鉛筆の書き込みがあるので、回覧雑誌『白樺』第二号に出されたことが分かる。

本文冒頭にも『顔の創(小説)』という表題と「木下」の署名がある。原稿用紙六枚。

二月の末、富田さんが、目の上と口の縁に絆創膏を貼って家に来た。

嘗て岡山の女学校の校長をしていた富田さんは教科書事件で有罪になり、妻は自殺した。出獄後、富田さんは足かけ五年満州にいたが、昨年の暮れ、東京に戻ってきた。信州の牧場を監督している友人に誘われて出かけ、帰りに馬から落ちて怪我をしたのだ、というストーリー。

### 【雨後の月夜】

扉がつけられ、『雨後の月夜』の表題と「小青」の署名が墨で書かれている。《白樺三》と紫鉛筆の書き込みがあるので、回覧雑誌「白樺」第三号に出されたことが分かる。

本文冒頭にも『雨後の月夜』の表題と「木下」の署名がある。原稿用紙四枚。雨が止んだ後の秋の庭や近所の景色のスケッチである。

### 【紐（短歌）】

扉がつけられ、『紐（短歌）』の表題と「木下小青」の署名が墨で書かれている。《白樺4》と紫鉛筆の書き込みがあるので、回覧雑誌「白樺」第四号に出されたことが分かる。

本文冒頭にも『紐』の表題と「木下」の署名がある。原稿用紙二枚。短歌十三首。一部の短歌は、公刊「白樺」第一巻第一号（M43・4）に発表された。

### 【橋本屋】

扉がつけられ、『橋本屋』の表題と「木下」の署名が墨で書かれている。《白樺4》と紫鉛筆の書き込みがあるので、回覧雑誌「白樺」第四号に出されたことが分かる。

本文冒頭にも『橋本屋』の表題と「小青」の署名がある。最初の「八月十四日」という章は原稿用紙六枚。雨村の家族に送られ、小田原から湯本行の電車に乗り、箱根の橋本屋につくまでを描いている。次の「八月十五日。」は原稿用紙九枚。宿の一日のスケッチ。

最後の「八月十六日」は原稿用紙七枚。宿の一日のスケッチ。この「八月十六日」に少し手を加え、公刊「白樺」第二巻第一号（M44・1）に『山』の総題の下、「八月十六日」として発表した。

### 【図書館】

扉がつけられ、『図書館』の表題と「木下」の署名が墨で書かれている。《白樺5》と紫鉛筆の書き込みがあるので、回覧雑誌「白樺」第五号に出されたことが分かる。

本文冒頭にも『図書館』の表題と「木下」の署名がある。原稿用紙二枚。図書館のスケッチで、小僧が冬服にかわったことを描き、最後に『思へば今日は十月一日であつた。』とまとめている。

### 【帯】

扉がつけられ、『帯』の表題と「小青」の署名が墨で書かれている。《白樺9》と紫鉛筆の書き込みがあるので、回覧雑誌「白樺」第九号に出されたことが分かる。

本文冒頭には『帯』の表題のみ書かれ、署名はない。原稿用紙三枚。短歌十五首。一部の短歌は、公刊「白樺」第一巻第一号（M43・4）に発表された。

### 【新富座のはねたの八十一時だつた。】

扉に『新富座のはねたの八十一時だつた。』の表題と「小青」の署名が墨で書かれている。《白樺10》と紫鉛筆の書き込みがあるので、回覧雑誌「白樺」第十号に出されたことが分かるが、本文はなく、目次でも抹消されている。

### 【断線】

署名は「小青」。原稿用紙八枚。最後に《（42、12、11）》とある。



武者小路の家からの帰途、電車が断線事故に遭い、線路に下りた人が二人死んだという体験を描いたもの。

### 【袖】

扉がつけられ、『袖』の表題と「小青」の署名が墨で書かれている。本文冒頭にも『袖』の表題と「小青」の署名がある。原稿用紙二枚。短歌十三首。一部の短歌は、公刊「白樺」第一巻第一号（M43・4）に発表された。

なお、第三集「女の人」の最後には、公刊「白樺」第一巻第一号（M43・4）に発表された木下利玄の『紐』の原稿五枚も綴じられている。

## 第三章 素材のやりとり

十四日会に木下利玄が出した小説『万霊塔』が、もともと志賀直哉が考えた素材を木下利玄に譲ったものであることはよく知られている。志賀直哉自身、『木下利玄』（T13・4「日光」）で『万霊塔』といふ、これは想は私のものであったが、手に合はず、精しく話して、それを木下が書いた。』と回想している通りである。第二章で紹介した『月見草』も木下利玄の考えていた筋を武者小路実篤との合作で仕上げたものであった。

こうした素材のやりとりが、他にもあったことが今回の調査で分かったので、次に報告したいと思う。

### 第一節『善悪柿太郎』

十四日会以前のものが、まず取り上げたいのが、『善悪柿太郎』である。木下利玄の特別資料の中には、『善悪柿太郎』という作品の冒頭部分がある。署名は「はるさむ」。二十五字×二十行の輔仁会編纂部用原稿用紙一枚に墨書である。まず全文を紹介する。

《むかし某村に翁と姫住みて何不自由なく暮しけるが一人の子だになかりければいとわびしく思ひてこの村より程遠からぬ俵山の黒天に百日の願かけて始ハ只「一人の子を賜へ」とのみなりしが後にはもどかしがりて「かたはにてよきまゝ、に何卒一人の子を賜へかし」と心こめて祈りけり  
さて今日ハ愈百日目の結願と云ふ日なれば翁姫ハ気もいそぐ夕ぐれまちて常の如く俵山へ詣でぬ、  
頃しも秋の末つ方なれば》

これを書き直したと思われるのが、『善悪柿太郎物語』で、署名は「里杲」。二十五字×二十行の輔仁会編纂部用原稿用紙一枚に墨書である。

《今は昔某の国某村に孫右衛門といふ者あり妻ハ【注・二字分空白】と云ひて僅かの田畑にてかつ／＼の暮なりしが夫婦睦まじきを喜びてさのみ富貴をも羨まざりきされど五十路の今に至り一子のなきを悲み二人云ひ合せてこの村はづれなる俵山の黒天に三七日の立願なし始は只一子をもうけさせたび給へとのみなりしが後にはよし不具なりとも一子をとぞ祈りける  
さて結願と云ふ日の夕夫婦は例の如く俵山にぞ詣でける  
折しも秋の事なればつるべ墮しと云ふ日影西に白れて》

これらは書き出しだけしかないが、実は、この題材はもと志賀直哉のものであった。明治三十七年二月一日の志賀日記に《善悪柿太郎を生れる迄で書く。》とあり、三月二十九日の志賀日記には《午后木下来りしが復習をやめ七時半頃迄で話し善悪柿太郎の種をやる。》とあるからである。志賀直哉が書こうとして挫折した小説の種を木下利玄に与えたわけだが、木下利玄も仕上げられずに終わったようである。『学習院輔仁会雑誌』にも、この作品は掲載されていない。

## 第二節「清兵衛」

では、木下利玄の持っていた素材を志賀直哉が貰ったことはあるのか。

木下利玄の特別資料の中に、『清兵衛』という断片がある。署名はないが木下利玄の筆跡だと考えられる。二十四字×二十行の東京相馬屋製原稿用紙一枚にペンで書かれている。

冒頭は、『清兵衛は伊豆の岩村の漁師の子である。』と書かれ、抹消されている。その後を翻刻すると次の通りである。

《年末で小供たちの学校は休であつた。お時は戸外から帰つて来て「おつ母、お正月に穿くのだから下駄がほしい」と申し出た。お時は友達が春を迎へる支度について話すのをきいて自分も新しい下駄がはいて見たかつた。

お時の母はその前にお時から誰さんも持つてゐるし彼さんも持つてゐるからゴム襪ゴムズを買つて呉れとせがまれた時自分が今に古綿をかゞつて作つてやらうと云つてその儘させた事があるので此の願はさう無下に斥ける訳には行かなかつた。》

抹消されているが、『お時』の名前が最初に出てくる所では、『十になる』と年齢が記されていた。また、『戸外から帰つて来て』の前にお時が遊んで居た相手として、『庄吉（弟）やお六（妹）』の名前が一旦は書かれ、抹消されている。

この断片は、新『志賀直哉全集』に未定稿108『説小清兵衛（梗概）』として収録されている『真鶴』の原型の冒頭部分と大変よく似ている。参考までに、志賀直哉の未定稿108『説小清兵衛（梗概）』の始まりを引用しておく。

《清兵衛は岩村の漁夫の長男である、三年程前に根府川の尋常小

学校を卒業して今は時々親戚と共に海の仕事にも出てゐた。

彼には十になる妹と、八つになる弟と、五つになる妹とがあつた、上の二人は今彼のいつてゐた小学校へ通つてゐる、

年末になつた。休で妹や弟は朝から家で、遊ぶである、或る日の事、上の妹のお時が、「ゴムマリが欲しい」といひだした。「誰れも持つてゐるし彼も持つてゐるから買つてくれ」と切りに母にせがむ、母は古綿をかゞつて、自分が作つてやらうといふ。お時の申し出しはトウ／＼泣ね入りになつて了つた。其後お時は、又別の申し出しをした。それはお正月にハクのだから赤い鼻緒はなぢの日和下駄を買つてくれといふ事だ。此事は母の方が遂に負けて、母から親戚に其事をいふ事にした。親戚は直ぐ承知して、「そんなら清兵衛のも、庄吉のも、お六のも一緒に買へ」といつて、五十錢銀貨を一枚投げ出した。》

こちらの『説小清兵衛（梗概）』には「志賀」という署名があるので、志賀自身が書いたものであることは確かである。『説小清兵衛（梗概）』末尾には『（四二、十二月廿二日。） 於湯河原。』と書かれているが、四十一年の書き間違いである。

興味深いことに、志賀の『説小清兵衛（梗概）』は、志賀家からではなく木下利玄が残した回覧雑誌関係の資料の中から発見されている。もしかししたら、志賀は、木下利玄のアイデアを一旦は自分で先まで展開させながらも、木下利玄に返そうとしたのかも知れない。

明治四十二年一月三十日に木下利玄が書いた『帰京』という作品は、木下利玄が志賀直哉と二人で湯河原から帰京する様子を描いたものだが、小田原まで歩く途中の茶店で、『小説清兵衛の材料』のために岩村や小学校のことを取材する志賀の姿を描いて『材料の運用のうまいのには実に敬服した』とコメントしたり、『是からの道は小説「清兵衛」にある道だ、清兵衛が法界節の女を思ひながら、日暮弟をつれて帰る

道だ、》として、志賀を清兵衛、自分を弟の庄吉に擬えている。早川の長橋で休んだことを書いた時にも《茲ハ清兵衛が弟と弁当をつかつた所だ。早川の水は清兵衛が弁当をつゝんだ竹の皮を棄てた昔も今日も変らず》云々というコメントを書き込んでゐる。志賀直哉の『説小清兵衛（梗概）』を読んだだけにしては、言及が些が多い気がする。もともと木下利玄の考えた素材であり、それを志賀が梗概としてまとめとくれ、それについて語り合つた直後だからこそ、こういう思い入れのあるコメントが何度もなされたのではないだろうか。

### 第三節「襖」

もう一つ、志賀直哉と木下利玄との間の素材のやりとりをうかがわせる作品がある。第二集「ふところ」に綴じられた『襖』である。この作品の素材は、志賀直哉の『襖』（M44・10「白樺」）とよく似てゐるので、参考のために次に全文を紹介する。

《  
説小 襖 いすま

木下

暮から正月へかけての休みに、読みたい本を四五冊持つて湯河原に行つた。中西屋で日あたりのいゝ室をと云つて、南向の二階の一室に案内された。隣には夫婦に三四人子供が居て、十六七の子守らしい娘の姿も見えた。

二階のすぐ下があんまり広くない庭になつて塗池が揃へてある。池は瓢箪形になつて真中のくびれた処に飛石がある。自分は物に倦きた時は椽側に出て、此の池を見下すのが常であつた。

此の池には五六疋の緋鯉と一疋の真鯉がはなしてあつたが常住この一疋の真鯉は緋鯉の群からはなれて瓢箪の頭にあたる方の狭い処に沈んで居た。

ある時池の方で小供の声が聞えるので欄杆に凭れて見下すと子

供が二三人竹で此の真鯉を緋鯉の方に追ひやらうとして居るのだ。鯉は竹の下をくゞつてはツゝと逃げて、よどんだ塵が上つて濁つた水の中に影をかくして仕舞ふ。それがすむとやつぱりもと居た方に帰つて居たりして中々小供の思ふやうにならない。

私はそれが面白くてあかず見て居ると、その池の傍に隣室の子守が赤児を絆纏にしよつて、やつぱりそれを見て居るのが目についた。午後のうす日は是等の人や物を照して居る。

見ると子守娘は自分の姪のお鈴さんにそっくりだ。顔のぼつと赤い所耳が大きくて銀杏返し of 鬢の上に出てゐる所迄似て居る。よく似た娘もあるもんだと思つて居た。トその娘が此方を見上げた。不意に自分はあらぬ風へ視線をそらしたが、娘の視線は未だ自分の上に来てゐるやうな気持ちをした。

視線を再び塗池に帰した時子守は未だ自分の方を見て居た。眼と眼が再び逢つた。若い男女の視線が逢ふ時恋はなくとも心はほんのりとなる事が多い。自分は立つて室に入つた。

その晩はいつになく暖い夜であつた。自分は机に向つて居た。隣では九時をうつと、皆床についたらしく電氣を消したので欄間の向が暗くなつた。

自分は十時半頃迄起きて居た。十時半に呼鈴をならして女中に床を命じて置いて湯殿に下りた。湯はぬるかつた。向ふの宿の二階でなまけたやうな三味線の音が聞えて居た。

室に帰つて、電氣を消して床に入ると、谷川の音は、眠を催す子守唄のやうにもものうく枕にひゞいた。向ふの宿の三味線はボツン／＼と流の間を縫うて来た。

自分はずん／＼夢の国の方へ歩いて行つてゐるつもりだつたら、ふと呼びかへされた。スーと物のすべる音だと気がついた。考は瞬時に馳せた。

襖のあく音だ。自分の室と隣の室は襖一重で隔てられて居る。そ

の襖を背にして自分は右枕に寝て居た。

静かに左枕になつて見ると襖が半分あいて居て、その襖の傍に寝て居るのは、若い女だと云ふ事が、うす暗い行燈の光で知れた。女の匂がブンとした。

若い女は白い手を夜衣の袖から出して、此方向きに、枕をはづして居る。昼間の子守だつた。

自分の心には悔や時めく心が一時にきそつた。はげしく打つ胸をかくしてじつとして居た。襖は未だしまらぬ。未だしまらぬ。白い手が動いて襖はしづかに閤を滑つた。

あくる朝自分は昨夜の事を夢のやうに考へて、昨日昼間の自分のふとした事から、若い女のそぞろ心を、唆かしたのを悪かつたと思つて居たら隣で聞えよがしに昨夜は此の襖があいたやうだと云ふ声がある。

自分は不平に堪へなかつた。しかしだまつて居た。

二三日たつたら隣の客は熱海へ行つて了つた。その客のたつた後にその室に行つ見たら床の間に鏡台があつた、その坦斗を開けて見たらバ三番目のに白粉のあいた壇があつた。媚かしい匂が鼻を打つた。

此の時自分はつくづくお鈴さんが恋しかつた。お鈴さんはあけて十六になる。お正月のマーガレットには紺のリボンをかけて居やう。』

旅館の隣室の子守の顔が、好きな別の人物の顔を思い起こさせるので主人公がしばしば見つめたこと、夜、子守によつて隣室との襖が開けられたこと、翌朝、隣室の主人が襖が開いたことを話し、主人公のしわざだと疑っていることなど、志賀の『襖』と共通するモチーフが用いられている。

志賀は後年、『創作余談』で『「襖」これも事実の幾らか潤色された

追憶で、函根声の湯での経験を数年後、季節はづれの淋しい小涌谷温泉で憶ひ出し、書いた。』と語っている。

どこまでが志賀の実体験だったのかは分からないが、志賀の体験談を聴いた木下利玄が、まず作品化し、それを読んだ志賀自身が、さらに作品化したのかも知れない。

こうした素材のやりとりをし合いながら、志賀直哉も木下利玄も、自らの表現を工夫していったのであろう。それが可能だったのは、彼らに、自分独自の素材で作品を作るべきだという考えよりも、どのやうに書くかこそが大切であるという価値観があつたからだと考えられるのである。

#### 〔付記〕

木下利玄の原稿類は、神奈川近代文学館の特別資料を閲覧させて頂きました。

また、この研究にあたって、同志社女子大学の国内研究助成Bを受けました。

お世話になりました神奈川近代文学館の皆様、木下利玄のご遺族の皆様、そして同志社女子大学に、この場を借りて、篤く御礼申し上げます。

#### 〔注〕

(1) 例えばS56・1「文学」掲載の紅野敏郎「木下利玄論(下)―新資料による「白樺」前史―」では、『お京』や『万霊塔』の草稿の他、回覧雑誌の概要が紹介されている。

(2) S57・10「文学」掲載の紅野敏郎「木下利玄日記(新資料)(下)―「白樺」前史―」で紹介されている。

(3) 調布市武者小路実篤記念館「白樺の文学」展図録に写真が掲載されている。

(4) 調布市武者小路実篤記念館「日記に読む実篤」展図録に写真が掲載されている。